

二十七、大乗善根界

尊く懐かしき夏の聖会もすんだ。これで今年の夏も過ぎてしまった気がする。われらの一年は、聖会から聖会を中心に移ってゆく。それほど聖会は、われらにとつては、重要尊重の一大事因縁である。

本年の講義は、論註上の本文のままを、莊嚴妙色功德成就から、触、水、地、虚空、雨、光明、妙声、主、眷属、受用、無諸難、大義門、所求満足と、国土莊嚴の中を十二種で、一週間には少し無理なくらいであった。しかしまことにまことにありがたいことであつた。国土も仏も菩薩もすべて南無阿弥陀仏の内容であり、一心の内容であり、如来願心の具体相ではないか。すべては豊らかなる念仏の内容である。

大義門功德成就の世界においては、浄土のことを大乗善根界と言われる。浄土は、大乗そのものを根として成就される世界であるがゆえである。浄土は大乗の善根界である。国土が大乗であるがゆえに、国土において生ずるものも、他方より国土に至るものも大乗であり、生じたるものすべてが大乗に輝き、大乗を顕現するのである。されば浄土には女人、根欠、二乗等が生じないのみならず、かかる譏嫌すべき名さえないと説かれる。しかし他方国土の女人根欠二乗が浄土に足を触れたら、すべて大乗の菩薩となる。これすなわち大義門の要旨である。

近ごろの日本ではだれもかれも、われこそは大乗に生きるものだと思つている。しかし真実如来の名号を聞信することなく大乗の世界の呼吸ができるであろうか。二乗地に墮ちるといふことは菩薩の死であるとは、龍樹菩薩の言葉であつた。多くの人は、仏道に足をかけつつ、大概は二乗地を出ることができないのではないか。

悪癖のついた教家、古株の同行は、不知不識の間に、自分の手元を勝手にかためて、どうすることもできない固い殻を作つて、二乗地に墮ちているのではあるまいか。

二乗を救うものは、大乗善根界たる浄土からの声であり、願力であり、薫りである。浄土からの招喚以外に二乗は救われない。それが天親曇鸞二菩薩の仰せてある。

二乗の世界は古びた固い殻である。そのままではかぎり浄土の声は聞こえない。如来の至純明澄なる招喚の声は聞こえない。したがって澁刺たる生命の躍動はあり得ない。

信は干からびた概念ではない。無責任自堕落な放縦でもなく、ぎこちない束縛でもなく、生命の自由無碍なる輝きである。喜びである。

曇鸞大師は、大義門功德成就の如来の願心を現して、

「是の故に願じて言はく、我国土は、皆是れ大乘一味にして、平等一味ならしめん。根敗種子(根を生じない、くさった種、即ち二乗)畢竟して生ぜず、女人残欠の名字亦是れを断ず。」
と言われた。

ああ。大乘一味。平等一味。真実の浄土とは、実にこれであつた。

二乗、根欠のみならず、十悪も、五逆も、謗法も、そうした差別は浄土には発生しない。生ぜないのみならず、かかる差別も、浄土においては、本願海に融合して、大乘一味平等となる。一切が融けて一味平等になる、これすなわち大乘善根界と言われるゆえんである。国土の功德力である。

しかしそれは、浄土においてのみではない。聖人は正信偈において、

「凡聖逆謗齊しく廻入すれば、衆水の海に入つて一味なるが如し。」
と讃嘆せられた。

凡夫も聖者も、悪逆も、廻心懺悔して、本願海に帰入することによつて、平等一味となるのである。もしこの平等一味の世界が無いならば、宗教ではない。仏教ではない。真実信心ではない。

本願の救いは、平等一味である。聖人は「小聖、凡夫、五逆謗法、無戒闡提、みな廻心して、真実信心海に帰入しぬれば、衆水、海に入つて、ひとつあぢはひとなるが如しとなり。これを如衆水入海一味といふなり。」と釈せられた。

人は本願海においてのみ一味にならしてただける。

2

しかしそこには、一切のものは、斉廻入、斉しく廻心帰入することが命ぜられてある。もし廻心帰入することなく、ほんとうに頭を下げることなく、愛欲や名利に走りつつしかも頭をば高く上げたままで、平等一味を語るならば、そこには、恐るべき邪道のみが生まれてくるであろう。

平等一味、大乘一味の世界は、差別の凡聖によつて生まれるのではなくて、大乘善根界の国徳、あるいは如来本願海の威神功德力によつて生まれるのである。同一信心の世界であり、同一念仏の世界である。如来廻向の同一念仏の世界なるがゆえに、善人も悪人も、智者も愚者も一つに融けて一味平等となることができるのである。

善人や智者はそれを主張して廻入せず、悪人愚者は、愚悪に卑下し、あるいは愚悪にただれたままに自堕落になつて、廻心帰入しないならば、それぞれはみな別れ別れのままであつて、浄土には通じていない。

廻心帰入こそは、本願海に入る唯一の門である。ゆえに一心帰命をもつて宗教の生命とせられるのである。

『歎異抄』には、

「弥陀の本願には、老少善悪の人をえらばれず、ただ信心を要とすと知るべし。」

と説かれる。これまことに以上と同一の世界を表現して下さったのである。

しかしもし、老少善悪が、老少善悪のままに固まってしまつて、老は老で信じ、善は善で信じ、その他一切の差別のままが、そのままの上に信を固定して動かないならば、信心は、かえつてますます人を永遠に隔離する因となるであろう。

そこで、「ただ信心」だけが肝要であるとは、老少善悪は、老少善悪のままが信心によつて一味平等の世界に出されることによつて、老少善悪を超えることではなければならぬ。本願海は、大乘一味である。衆の河水が海に入つて一味なるがごとく、信心を要とすとは、それぞれの世界に立て籠つての信心ではなくて、本願海に廻入することである。そこに信心の世界がある。本願の不思議は、老、少、善、悪それぞれを、本願海に廻入せしめることによつて平等一味の信に生かして下さるのである。差別のままが平等一味であることこそ宗教の妙趣である。

浄土は大乗善根界である。大乘一味平等なる世界である。かかる大乘善根界を背景として生きる念仏の行者もまた、「如来浄華の衆は、正覚の華より化生す。」とて、同一なる如来正覚の一心より誕生したものである。

われらの聖会は、ありがたく尊く幕を閉じて、同胞はそれぞれの世界に出て行つたが、何よりもわれらの聖会をかくも尊くあらしめたものは、実にこの一味平等の世界がほのかに成就されたがゆえではないか。

大義門功德成就の世界において、曇鸞大師は、声聞はとうてい仏道の根芽、すなわち「菩提心」を発すことあたわざるを明かし、しかも、本願の不可思議神力は、菩提心すなわち仏道の根芽を生ずるあたわざる二乗を撰取して、浄土に生ぜしめ、不可思議神力をもつて、無上道心、すなわち大菩提心を生ぜしむることを説いて、「此の如き、生ずべからずして而も生ぜしむ、所以に奇とすべし。然るに五の不思議中に仏法最も不思議なり、仏能く声聞をして復無上道心を生ぜしむ。真に不可思議之至りなり。」と結ばれた。

二乗がけなされるゆえんは、無上道心、すなわち菩提心を発すあたわざるがゆえである。

無上道心とは、成仏の願ではあるが、しかし菩薩の願心は、己が成仏したいままが、十方衆生を成仏せしめずばおかないという利他の心に裏づけられていることである。これ他力の信心が、願作仏心と言われ、同時に、度衆生心と言われるゆえんである。

他力の信心は、浄土の菩提心である。一見、信心は、己一人の成仏を願うところの願作仏心ではあるが、如来の十方衆生を救わずば正覚を取らじとの誓願によつて発起するものであるがゆえに、願作仏心はそのまま度衆生心と言われるのである。信心はまことに菩提心である。

まことに如来は、いかにしても起きようのない、この大菩提心を発さしめたもうのである。「生ずべからずして而も生ず」不思議の神力と云うべきである。

われらの聖会は終った。百幾十人の同胞たちは、ついにほとんど一人残りなく、久遠の両親の不可思議効力の前に五体投地して懺悔し感謝した。

われ今、無言のうちに、同胞の精進の尊さを憶い、深き喜びと悲しみの流れに合掌して、思いを遠く同胞の上にはせる。ああ。仏力の不思議なるかな。